

エピソード3 女子大生を誘拐してみた

「ん、んん……」

美人女子大生の相沢 凜子（あいざわ りんこ）はうとうとしながら目を覚ました。彼女は呆けながらも目を瞬かせて周囲を見渡した。

そこは薄暗い部屋の中、照明の類は何もなく、小さな天窓から僅かな光が差すのみであった。家具やカーペットなど人間味のある代物は悉く駆逐されていた。部屋自体が石でできているようで、温かみは欠片もなくその床はひどく冷たかった。まるで牢屋のよう、というか牢屋そのものであるように思えた。

そして、そんな空間に似つかわしくない美少女がそこにいた。

「あら、目が覚めたんですね」

美少女は簡素な造りの木の椅子に腰掛けていた。艶やかに舞う漆黒の黒髪、血色のいい肌、目を見張るほどの美貌、完璧な黄金比を辿るスタイル、それにぼちりと見合った制服、それは凜子が今までに出会った女性の中で最も美人だと思える女の子であった。彼女に同姓を愛する趣味はなかったが、しかし、そのあまりの美麗さに彼女の胸は高鳴った。

凜子は恐る恐るその美少女に声をかける。

「あ、あなた……いったい誰……?」

「私? 私の名前は小野原 来夢よ」

来夢は淡々と自分の名前を告げた。

「小野原、さん……えくと、ここは……どこなんですか?」

「さあ、それが私も分からないですよ」

「わ、分からない?……ってうわあ! なんですかあれ!」

凜子はやっと自分の恥ずかしい体勢に気がついた。彼女は両足を上げて股間をおっ広げにした状態で、縄によって完全に固定されていたのだ。所謂、まんぐり返し、というやつだ。カットオフのデニムのショートパンツに黒のストッキングを合わせ、黒いロングブーツを履き、英字ロゴのティーシャツの上からチェックのシャツを着たその素敵なコーディネートも、この下品な体勢の前ではひどく無力であった。むしろ、その間抜けさを助長していると言っても過言ではなかった。

「ちよ、ちよつと、なんでこんなことになってるの!?! ねえ、こ、こ

「れってあなたがやったんですか？」

「いやいや、そんなわけないじゃないですか」

来夢は鋭利な視線を凜子に送る。

「いや、だってどう考えてもあなたじゃないですか！ ここにはあな
たしかいないわけなんだし。早く、解いてください！ は、恥ずかし
いです……」

「それはちよつと……できませんね」

「っ!? な、なんですか？」

「だって、私もあなたと同じように人質の一人なんですもの」

「ひ、人質い!？」

声を裏返らせながら驚愕する凜子。もはやなにがなんだか分からない
様子であった。

「ひ、ひ、ひ、ひとちぢっ、人質ってどういうことですかあ!?! 一体、
なにがどうなってるんですか、ぜ、全部説明してくださいっ!」

ヒステリックに叫ぶ凜子に対して来夢は深くため息を吐いた。そし
て、気怠そうに説明を始める。

「私達はね、とある誘拐犯に囚われてこの部屋に閉じ込められてしま
ったの。状況はかなり深刻ですね。扉を開けようとしても開かないし、
他に脱出口はない。手も足も出ない、万事休すですよ。私たちはもう
ここでじっと助けを待つかありませんね。来るかどうかも分からな
い助けをね……」

「そんな馬鹿な……私、誘拐された記憶なんてありませんよ？ たし
か、大学の授業が終わって帰宅してる最中だったはず……うくん、だ
めだ、全然思い出せません」

「私も同じですよ。記憶が少しばかり消失しているの」

「記憶の消失……はっ」

なにかに気づいたように凜子は顔を上げる。

「これってまさか、巷を賑わせている誘拐犯なんじゃ!」

「その可能性は十分に考えられますね。私たちも例の誘拐犯にしてや
られたってわけ」

「そんな……なんて不幸な……」

凜子は力が抜けたようにぐったりする。たしかに、誘拐犯に誘拐さ
れるなど、よっぽど不幸人でなければ体験できないことである。

「……あ、でも」と気を取り直したように凜子は言う。「犯人が例の誘

拐犯ってことは、私たちは安全に解放されるってことですよ。だってニュースで人質は全員無事に解放されてるってやってましたもんね！」

「いや、そうは言い切れないと思います」来夢はきっぱりと言い放つ。「そもそも私達を攫った誘拐犯が件の誘拐犯かどうか分からないし、まだなんとも言える状態じゃないと思うんですよ。もしかしたら、身代金を要求されるかもしれないし、壊れるまで強姦されるかもしれないし……最悪殺されるかもしれない」

「ひっ……」

来夢の言葉に凜子は体を震わせる。解けかけた緊張が再び張り詰める。たしかに、来夢の言う通り、誘拐犯が噂の誘拐犯であるかどうかは分からなかった。

「だとしたら、やっぱり安心できる状態じゃないんですねえ」

「そういうことですね」

「はあ、困ったなあ」

凜子は深くため息を吐き、困ったさを十分に表現した。そして、恥ずかしそうに体を揺すらせる。

「……って、ていうか、どうして、小野原さんは自由なのに、私だけ縛られているんですか？　なんですかこの不公平！　それも誘拐犯の指示なんですか？」

「ええ、そうですね。私は、あなたを見張っているように誘拐犯から言われているんです。悪く思わないでくださいね。あなたを解放したら私もどんな目に遭うか分かったものじゃないの。あなたの束縛を解いてあげたいと思うけれどそれはできないんです。本当にごめんなさい」

「そ、そういうことなら……しようがない、ですねえ」

不服そうな顔をしながら凜子は呟く。居心地が悪そうに彼女は体を振らせる。しかし、縄は外れそうもなかった。

凜子は諦観気味にため息を吐く。そして、天上を見上げながら自分の未来を憂う。果たして、安全にここから脱出することができるのか、警察は犯人を見つけ出してくれるのか、彼女の脳内に渦巻く暗雲はひたすらに彼女の不安を煽るのであった。

しかし、悲しいかな、凜子は全く気づいていなかった。目の前の美少女こそが真の誘拐犯だということに……。

そんな凜子の元に来夢はゆっくりと近寄る。凜子は恥ずかしそうに目を背けており、来夢はその表情の美しさに舌なめずりをした。凜子の羞恥に満ちた赤面は非常に魅力的なもので、彼女にとって欲情せざるを得ないものであった。

やがて、来夢は凜子の傍でしゃがみ込んだ。彼女はその美脚に手を伸ばす。

「な、なに……なにするんですかあつ？」

慌てながら凜子は言う。

「いや……ブーツが少し窮屈かなと思ったから、脱がせてあげようかしらと思っただけですけど……」

来夢がそう告げた途端、凜子は顔を青ざめさせた。そして、不自然なほどに冷や汗をかき始めた。

「あつ、いや、いやいやいや、そんな気を使わなくていいです。そのまま大丈夫ですから。別にブーツなんか脱がなくても大丈夫ですから、ねっ」

凜子は気遣い無用だと言って聞かせるが、来夢は聞く耳を持たないようで、彼女のロングブーツに手をかける。

「そんな遠慮することはないですよ。別に脱いで困ることもないでしょう？」

「い、いや、それはその……そうなんだけど、でも、その……」

凜子は羞恥に顔を真っ赤にしながら口をもによもによと動かし、要領を得ないことを話す。駄々を捏ねる子供のように足をバタつかせるが、来夢の手に捕らえられてしまい、もはやどうにもならない様子であった。彼女の抵抗は全くの無意味であった。

その様子を見て、来夢は薄っすらと微笑む。彼女は凜子の恥じらう様子を楽しみながらロングブーツのジッパーを下ろしていく。

「待って、待って待って待ってえ！ やめてください！ 脱がせないで！」

「……………」

来夢は黙したまま作業を続ける。やがて、完全にジッパーを下ろしきった彼女はブーツをゆっくりと脱がせていく。焦らすかのようにゆっくりと……ゆっくりと……。

「ああ……だめえ……だめえ……」

凜子は目を瞑りながら首を何度も横に振るが、彼女のブーツは無力

にも脱げていく。もはや彼女を止めることができないと判断した凜子は絶望に満ちた声を讒言のように漏らす。あまりの羞恥に目に涙が溜まる。

凜子の制止も聞かず、来夢は彼女のロングブーツを脱がせていく。そのブーツは持ち主の意に反して来夢の思う様にするすると、まるで来夢に協力しているかのように彼女の美脚からその身を脱していく。彼女の黒ストッキングが晒されていく。

「いや、だめ……だめええええっ！……！」

凜子の叫びも空しく、ブーツは……スポリと脱げた。その瞬間――

むっわあぁ~~~~~ん

もわあという湯気と共に、部屋に強烈な臭いが拡散していく。納豆の臭いと銀杏の臭いを混ぜ合わせたような悲惨なまでの悪臭が、部屋の埃っぽい空気を変質させていく。とてつもない悪臭だ。耐え難い悪臭だ。濃厚な臭いが二人をゆっくりと包んでいく。もはや、その原因は一つしか考えられない。その悪臭の根源は言うまでもなく――凜子の足裏であった。彼女の足裏からこの悪臭が発散されているのだ。

当然ながらその足臭は凜子の鼻にも届く。咳き込みそうになるほどの強烈な足の臭い。例え、それが自分の臭いであっても、それでも耐え難いほどの悪臭であった。ツーンと鼻に突き刺すような刺激臭が彼女の鼻腔を暴れ回る。悲しいほどに、情けないほどに自分の足は臭かった。

しかし、そのことから凜子を不潔な女子大生だと断ずるのはあまりに酷だと言える。彼女は自分の足の臭いがキツイということを自覚しており、思春期の頃からその対策を怠ったことはなかった。毎日欠かさず、履いた靴は消臭し、足の臭いをとるクリームを使い、ミョウバン水に足を浸け、規則正しい生活を心がけていた。足の臭いを改善するためには恥を偲んで病院にも行った。足臭という美少女だとしても致命的な負のステータスを払拭するために、彼女は尽力した。不断の努力によって『足臭』という過酷な運命に立ち向かい続けた。

しかし、それでも凜子の足臭が消えることはなかった。彼女は幾度と無く対策を講じ、その成果を確かめるために足を自分の鼻に近づけ

るという屈辱の極みに値する間抜けな体勢で足の臭いを毎日チェックしているが、その度に彼女の足は無情にも臭った。えずきそうになるほどの濃厚な足臭が彼女の鼻を突くのだ。

自分の臭いならば好きになれるとはよく聞かすが、しかし、凜子はどうしても自分の足の臭いを好きになることはできなかった。自分でも嫌悪の情しか湧かぬ圧倒的な悪臭なのだ。それを自分の一部と認めるには、彼女はあまりに繊細過ぎた。

「う、うう……うう……」

凜子は涙を目の端から零しながら小刻みに震える。足から溢れ出す臭いは収束することもなく、無尽蔵に放たれ続ける。嘲笑うかのよう
に凜子の鼻をくすぐる。もはや言い訳のしようもないし誤魔化しようもない。彼女は擁護しがたいほどの『足クサ女』であったのだ。

——嗅がないで。どうか嗅がないでえ。

凜子は心中でそう願う。偶然にも、来夢の鼻が詰まっ
ていて、足臭を感じできる状態ではないことを祈る。しかし、彼女の望みは来夢の無情な一言にて粉々に打ち砕かれるのであった。

「臭い」

来夢は鼻を摘みながらそう吐き捨てた。

「っ……!!!」

来夢の言葉に凜子の繊細な心は見るも無惨に砕け散った。奈落の深淵へと堕ちていくかのような、大切な何かを失ったかのような、そんな感覚が彼女を支配した。絶対に他人には嗅がせたくなかった、嗅がせるわけにはいかなかった足臭を嗅がれてしまうなんて。恥ずかしくて、情けなくて、申し訳ない気持ちでいっぱいであった。凜子は顔を真っ赤にさせながらただただ俯くしかなかった。

そんな凜子の気持ちも知らずに——いや、むしろ、逆に十分に知っていたのか——来夢は彼女を詰り始める。

「ちよっとあなた……なんなんですか、この臭いは。鼻が曲がっちゃうかと思いましたよ。ねえあなた、どうして言ってくれなかったんですか？ どうして『私の足は鼻が曲がりそうになるくらいクサイので、ブーツを脱がせないでください』って言えなかったんですか？ おかげで私は嗅ぎたくもないあなたのくっさい足の臭いを嗅ぐはめになっ

ちゃったんですよ？ ドブかなにかに顔を突っ込んだのかと思いました」

「すみません……ごめんなさい……」

「可愛い顔してるのに、あなたの足ってこんなに臭いんですね。すんすん……おうえっ、やだ、ホントにクサイ……ほら、離れてるのにこくんなに臭っちゃう。むわくくんってくっさい足の臭いがします。あなたこの分たと、一ヶ月は足を洗っていないでしょう？ ダメですよ、ちゃんと洗わなきゃ。いくらあなたが可愛くたって足は臭くなるものなんですから。不潔な女の子は嫌われちゃいますよ。ま、洗ってこの臭いだったら本当に悲惨だけど、まさかそんなことはないわよねえ？」

「……………うっつ。ひっく……………ぐすっ」

来夢の罵倒を引き金として、美香はどうとう本格的に泣き始めてしまった。足の臭いを嗅がれ、鼻を摘まれ、蔑まれ、馬鹿にされ、自尊心を徹底的に蹂躪され、女としてのプライドを破壊され、恥辱に塗れ、彼女はもうただただ涙を流すしかなかったのだ。しかし、まんぐり状態で足からひどい悪臭を放ちながら涙するその姿はあまりに滑稽でありに情けなくてあまりに惨めで、その様子を客観的に分析してしまった凜子はまたさらに悲しくなってしまう、大量の雫をますます零してしまうのだ。もはや彼女に清純な美人女子大生という面影は全くなく、そこにいたのは百年の恋も冷めるようなひどい足臭を放ちながら間抜けなポーズで涙を流す、溢れ出す液体で顔をぐちゃぐちゃにした悲惨な女の子の姿であった。

「うう、ううううううっ！」

「なんですか、なに泣いてるんですか。くっさくさい足の臭い嗅がされて、泣きたいのはこっちなんですよ？ 分かります？」

死体に鞭を打つかのように来夢はさらなる追撃を加える。自身の言葉によって凜子が泣いてしまったという事は重々承知であったが、しかし、彼女には謝罪する気なぞさらさらなかった。むしろ、凜子が子供のように泣きじゃくる姿を見てさらに興奮している様子であった。来夢はさらに凜子を虐めるために、脱がせた彼女のロングブーツを手にとった。

「ほら、このブーツも。くんくん……うおえっ！ くっさくさい。酸っぱ臭くて納豆臭くてホントにひどい臭い。あなたちゃんと消臭してるんですか？ ダメよ。あなた、足が普通の人の何十倍も臭いんだから、

普通の人の何十倍も丁寧にケアしなきゃ。あゝあ、足のクサイご主人を持ってこの素敵なブーツも可哀想。店に並べられていた頃は艶々していて中も皮のいい匂いがしていたんでしょけど、今じゃもうその面影は欠片もありませんね。あなたみたいな足のクサイ女がこのブーツを履いちゃったせいで、ムレムレの汚いブーツに落ちぶれちゃったんです。日頃からきちんと消臭しておけばこんな臭いになるはずはないのに……足がクサイ上に、ろくに気を付けようもしないなんて、あなたって本当に女として終わっているんですね。最低。あなたみたいなズボラな女って、周りにくっさい臭いを撒き散らして迷惑をかけてもなんとも思わないんでしょね。顔が綺麗だからってなんでも許してもらえろと思っただら大間違いなんです。分かってます？」

「う、うえっ、う、うぶうっひっく、うえっくん、あああうう」

「ほら泣いてないで、あなたもこの臭いを嗅いでみてください」

そう言うと、来夢は凜子の顔面にブーツの内側を押し付けた。凜子のブーツから発せられる悪臭は彼女の顔面を覆い尽くし、鼻腔に侵入した。

「う、うああっ。い、いやああ！ く、くさっ、くさいですう！ やめてえ、ゲホッゲホッ」

「そうですよねえ、クツサイですよねえ。そうですよ、臭いの。あなたのブーツは自分でも咳き込んでくらくらい臭いんですよ？ ほらもっと嗅いで嗅いで？ 自分の臭いをきちんと自覚するんです。鼻をたたくさん鳴らしてくださいね。ほらあー！」

苦しむ凜子もお構いなしに、凜子はさらにブーツを強く押し付ける。今度は口元をブーツの上から無理矢理塞ぎ、鼻呼吸を余儀なくさせた。もはや拷問にも等しい所業であった。

凜子はあまりの悪臭に暴れ回ろうとするが、ロープでがっちり縛られているため抵抗のしようがない。そして、暴れようとすればするほど、呼吸が荒くなり、鼻で吸引する臭気の種類も増加してしまう。ブーツ内部の臭いは自分でもあまりに臭すぎた。

もちろん、凜子は毎日のようにブーツをケアしており、その悪臭が彼女のズボラさにあるわけではなかった。彼女は数々の対策を講じていた。消臭ボールを入れたり、スプレーを吹きかけたり、連続で履き続けないように他のブーツと入れ替えたりと、惜しみない努力を臭い対策のために注ぎ込んできた。しかし、自分の足裏と同じくまるで効

れていた。

「ん、ダメだ……もう我慢できない……」

凜子の顔に押し付けていたブーツを離すと、来夢は凜子のストッキングの足裏を舐め始めた。妖艶なその舌を這わせ、ねっとり舐っていく。

「ぶはあっ……はあはあ……うあっ、きやああっ！」

ブーツの悪臭から解放されたのはいいが、今度は足裏のこそばゆい感触が彼女を襲撃した。全身に鳥肌が立ち、体が震える。そして、自分の足を舐めている来夢を見て彼女は驚愕した。強烈な足臭を放つ自分の足を舐めるなんて正気の沙汰ではない。彼女は再びパニクに陥った。

「ん……んんっんあっ、ふむっ、にちゃ……」

「ちよ、ちよちよ、ちよっとお、な、なにしてるんですかあ……」

「べちゃ……なにつて、んちゆう……あなたの足を舐めてるんですよ……はむっ」

「なななな、なんで舐めてる、んですかあ……や、やめて……ひやううんっ」

「いや、やめない。ふふっ、あなたの足ってホントに美味しい。塩っ辛くて、苦くて、それにこの臭いも……ふふ、うふふ」

「う、い、ああああん！」

嬌声を上げながら悶える凜子を見無視し、来夢は彼女の足を舐め続ける。両手で凜子の足を持ち、頬を朱に染めながら奉仕をするかのよう舌を這わせる。足を舐める粘着質な音が部屋を包む。正常な思考を持つ人間からすれば、凜子の足は吐き気を催すほどの激臭であるし、その味も最悪なものであったのだが、しかし、変態美少女である来夢の前では別であった。来夢からすれば凜子のひどい足臭は芳しい香りであるし、その味は天界の満漢全席に勝るとも劣らぬ美味であるのだ。来夢は狂ったように足を味わい続ける。時には爪先を思いきりしゃぶり、その酸っぱくて塩っ辛い味を堪能する。凜子の足裏からは止め処なく足汗エキスが溢れ、官能的に彼女を魅了するのだ。彼女はそのエキスをまるで花に群がる蝶のように吸い尽くすのだ。

やがて、来夢は数分もの間、凜子の足裏を舐め続けた。涎塗れになった凜子の足裏は以前よりもさらにひどい臭気を放っており、もはや何メートルか離れていても臭ってしまうほどのものとなっていたが、